

現代文B 休業中の現代文Bの課題である。左記の□の指示をしっかりと読んで取り組むこと。

『戦う植物』

- ① 【本文】をルーズリーフに丁寧に写す。② 【学習の手引き】に取り組む。
- ③ 【漢字と語句のトレーニング】に取り組む。

『好き好き至上主義』

- ① 【本文】を読む。
- ② 「好き好き至上主義」とはどのような考えか書く。

★提出方法：ルーズリーフ（紙）、ホチキス留め、学年クラス番号氏名を記載 ★提出日：初回の授業 ★評価：平常点とする。

★その他：『戦う植物』②は取り組んだら加點、さらに答えが正しければ加點する。それ以外はもれなく取り組むことで評価対象とする。

【本文】 『戦う植物』

いなぎまひろ
稲垣栄洋

自然界は「弱肉強食」「適者生存」の世界である。

もちろん、ルールも道徳心もない。全ての生物が利己的にふるまい、傷つけ合い、だまし合い、殺し合いながら、果てしなき戦いを繰り返しているのである。まさに殺るか殺られるか、仁義なき戦いがそこにはあるのだ。

しかし、その殺伐とした自然界で植物がたどり着いた境地はなんだっただろうか。

植物は菌類との戦いの末に、菌類の侵入を防ぐのではなく、ともに棲む道を選択した。

そして、昆虫との戦いの結果、花粉が食べられることを防ぐのではなく、花粉を狙ってきた昆虫に花粉を運ばせるという相利共生のパートナーシップを築いたのである。

さらに動物との戦いの末に、子房の食害を防ぐのではなく、胚珠を守っていた子房を利用する方法を発達させた。そして、子房を肥大させて果実を作り、動物や鳥に餌として与える代わりに種子を運ばせるようになったのである。

植物は強大な敵と戦うだけでなく、敵の力を利用することを試みた。そして、戦いの末に、植物は敵である生物と双方に利益のある共存関係にたどり着いたのである。

殺伐とした自然界で、同盟を結ぶために植物がしたことはなんだったのだろうか。

菌類との共存関係を築くために、まずは自らの体内に菌類を招き入れた。昆虫との共存関係を築くために、花粉が食べられることを許し、さらには昆虫の餌となる蜜を用意した。そして鳥や動物に種子を運んでもらうために、果物という魅力的な贈り物を先に施したのである。

他の生物と共存関係を築くために植物がしたこと、それは、自分の利益より相手の利益を優先し、「まず与える」ことだったのである。「与えよ、さらば与えられん。」植物は、この言葉を説いたイエスが地上に現れるはるか以前にこの境地に達していたのである。

一方、人類はどうだろう。

人類は違う。自然界は「弱肉強食」「適者生存」なのだ。植物のように「共存」などという甘いことは決して言わない。

人類は世界中の自然を征服しつくしている。他の生物は完膚なきまでにたたき潰すのだ。今や、人類は、たった一日で百種を絶滅に追いやしている。まさに厳しい自然界で勝利を手にとろうとしているのである。

それだけではない。

そもそも、現在の地球環境は植物の祖先が勝手に作り替えてしまったものだ。

地球上を覆いつくしていた二酸化炭素を植物が吸収し、酸素という有害な物質を作り出した。そして、三十億年も歳月をかけて酸素をまき散らした結果、あり余った酸素は、オゾンと化して、地球全体を覆い尽くすようなオゾン層を作り上げてしまったのである。

その結果、どうだろう。酸素を利用する生物が進化を遂げた。そして、オゾン層によって地球に降り注ぐ有害な紫外線が減少し、多くの生物が地上に進出した。そして豊かな生態系というものができあがったのである。

この自然界は、しよせん、植物が作り上げたものなのだ。

人類は、植物が勝手に作り上げた地球の環境を本来あった元の姿に戻そうと懸命だ。

化石燃料を燃やしては二酸化炭素を排出し、地球の気温を温暖化しようと懸命に励んでいる。二酸化炭素濃度が高く、温暖な環境はまさに植物が誕生する前の原始の地球の環境そのものである。

さらにはフロンガスを排出し、植物が勝手に作り上げたオゾン層の破壊にも取り組んでいる。人類の取り組みによってオゾン層には、大きな穴があき始めたという。植物が生まれる前の地球のように、地球上に有害な紫外線が降り注ぐのは時間の問題だろう。

全ての生物は、もともとは地球上にはいなかったのだ。人類は森林の木々を伐採し、生物の棲みかを奪って、植物との戦いに勝利し続けている。やがて人類は全ての生物を根絶やしにし、全ての植物を絶滅に追いやることだろう。そうすれば、生命誕生以前の地球環境を取り戻すことだってできるかもしれない。

植物が改変した地球環境は、やがて人類の力によって本来の姿に戻るのである。

他の生物との「共存」を選んだ植物が正しいのか、他の生物の生存を許さず絶滅に追い込む人類が正しいのか、答えはやがて出るであろう。地球の歴史の中で繰り返されてきた植物をめぐる戦いの中で、人類が完全勝利をするのは、もう目前である。

はたして……その時勝者である人類が手にする世界とは、いったいどのようなものなのだろう。その時、人類はどのような暮らしをしているのだろうか。

【学習の手引き】

- 問一 「自然界で植物がたどり着いた境地」とは、どのような境地であったのか、説明しなさい。
- 問二 「現在の地球環境は植物の祖先が勝手に作り替えてしまった」とは、どのようなことは、説明しなさい。
- 問三 「地球の環境を本来あった元の姿に戻す」とは、どのようなことか、説明しなさい。
- 問四 「人類が完全勝利をするのは、もう目前である」とあるが、ここにこめられた筆者の意図について自分の考えを書きなさい。

【漢字と語句のトレーニング】

- 一 傍線部を読みなさい。
- 贈り物―贈呈する。
 - 工夫を施す―大きなイベントを実施する。
 - 甘いお菓子―甘露をなめる。
 - 紫外線―紫色の雲がたなびく。
 - 励む―激励する。
- 二 傍線部を漢字に直しなさい。
- きのこやカビはキンルイである。
 - 夏休みにコンチユウにくわしくなる。
 - ソウホウの言い分を聞く。
 - この価格はミリヨクテキだ。
 - 何事にも一生ケンメイに取り組む。
 - 食事の塩分ノウドを気にかける。
- 三 同音異義語に気をつけて傍線部を漢字に直しなさい。
- 不法にシンニユウする。
 - 大雨で水が畑にシンニユウする。
 - 車はシンニユウ禁止にする。
 - 進路セントクに迷う。
 - セントク物を干す。
 - 担当者がミツに話し合う。
 - 蜂が花のミツを集める。
- 四 次の漢字を熟語の上と下に使った言葉を探しなさい。
- 選―選□・□選
 - 伐―伐□・□伐
 - 減―減□・□減

【本文】

好き好き至上主義

もとかわたつお
本川達雄

迂生はときどき高校から、職業や進学先選びの参考になる話をしに来てくれと頼まれます。そこで生徒向けの職業案内書をいくつか読んでみたのですが、どれも「こういうことが好きな人はこの職業」というように、好きなことで仕事を選ぶように勧められています。私の好きなことをやるのが自己実現であり、それが幸せ。現実には妥協することなく、現実の制約を受けることなく、アイデアとしての理想の私、つまり自分の夢・希望をそのまま変えずに目ざして、それが実現するのが幸福だと考えるわけです。昔は快樂が多くて苦痛が少ないことが幸福と考えられていましたが、今ではそんなのは当然でもう問題にはならず、自分の好きなものを選んで自分の好きな暮らしを実現することが幸福なのだと考えます。これが選好充足功利主義の立場で、迂生はこれを「好き好き至上主義」と呼ぶことにしています。私が好きという一つの価値観だけで自分の世界を一樣に塗り潰すのを理想とするのですから、好き好き至上主義は多様性を大切にしない発想とは正反対です。好き好き至上主義を振りかざして、自分の嫌いなものとのつき合いを拒否してしまうことが、多様性の減少をもたらす大きな原因になっていると迂生は思っています。

多様性を大切にしない発想とは、多様なものの中には自身の嫌いなものも含まれているという事実を認めてそれを引き受けることだと迂生は思うのです。嫌いなものたちともつき合うという姿勢がなければ生物多様性は守れません。

普通、生物多様性というと、世界にはさまざまな生物がいるよという、自分の外の世界の多様性をさしますが、迂生は、自身の内にも(生物)多様性がある、そして、まず自身の内の多様性を認めることができなければ、自身の外の多様性ときちんと向き合うことなどできはしなないと考えています。自身の内に死や老いという、好きにはなれないものが組み込まれているのが〈私〉です。そもそも〈私〉は多様なのです。〈私〉が続くためには(嫌いなところも多々ある)パートナーと協力せざるをえないし、そうやって生まれた〈私〉の分身は、言うことなど聞いてくれないものですが、それも〈私〉の内の多様性でやっぱり〈私〉なのだと認めて、今の私はそれに道を譲って(いやいやであっても)死んでいくと、〈私〉はずっと続くことができます。嫌いなものも大切なのです。

〈私〉を取り巻くものたちの多様性ももちろん大切です。例えばオオカミのような大形の捕食者は我々にとって危険ですが、彼らがいないとなったらシカのような草食獣が増えすぎて、私の生きている生態系が崩壊してしまいます。自分が嫌いでつき合いたくないものも、やはりその存在を認めてそれなりにつき合う必要があるのです。

自然や世界は、自分の好きなものだけでできていくわけではありません。だから嫌いなものには目をつぶってしまえば、世界を正しく認識できなくなってしまう。自分自身についてだってそうです。自身は老い、死にます。これを嫌だと言って認めなければ自身というものを正しく捉えられません。また、分娩はつらい、子育てはめんどうだと言って避ければ、〈私〉は続かなくなります。

自分に都合のよいものだけを身のまわりに集めて世界を構築すると、自分自身もうすつべらなものになってしまうとは、マルチン・ブーバーが『我と汝』の中で述べていることです。彼は相手とのつき合い方を考えるうえで、「我とそれ」と「我と汝」という対比で考えを進めていきます。相手の好きな面しか見ないとは、相手を真の存在として認めていないことです。どんな人間だって、どんな生物だって、どんな物だって、自分にとって好きな面だけをもってしているわけではありません。自分の好きな面だけを見てつき合うとは、相手を、自分の好きを満足させる消耗品として遇していることになりません。相手に消耗品として接するのが「我とそれ」という関係です。

相手を物ではない汝として認めて関係を結ぶには、好き嫌いに関係なく相手の全ての面を引き受けねばなりません。それがつき合ううえで

の礼儀です。向こうが嫌がることをすれば、反撃されることだってあるでしょう。汝として認めるには、そういうことまでも引き受ける覚悟が必要です。相手と相互性のある関係を結ぶということです。相互性があれば相手に対する責任や義務やしがみが生じ、それらが〈私〉の一部を形成して、理想や夢の世界に漂ってしまわないように、〈私〉という存在に重みをつけるのではないでしょうか。

【好き好き至上主義】とはどのような考えか説明しなさい。】

-----これで現代文Bの課題は以上です。お疲れ様でした！-----